



支援機器の導入・選定

第Ⅲ章 ICF(国際生活機能分類)



【解説】

支援機器の選定・導入には、国際生活機能分類ICFのフレームワークを理解することが望ましいです。そこで第Ⅲ章では、ICFについて簡単に概要を説明します。



ICF (国際生活機能分類)

- International Classification of Functioning, Disability and Health
- 生活機能、障害と健康に関する国際分類
- 健康の構成要素に関する分類



【解説】

ICFは、国際生活機能分類の正式名称である英語のスペルの頭文字をとった略語になります。日本語では、国際生活機能分類と訳されていますが、直訳すると生活機能、障害と健康に関する国際分類となります。

のちほど述べますが、分類自体は障害を扱っていませんので健康の構成要素に関する分類ともいえます。



ICFはWHO-FICの中心分類の1つ

世界保健機関国際分類ファミリー

World Health Organization Family of International Classifications (WHO-FIC)

関連分類

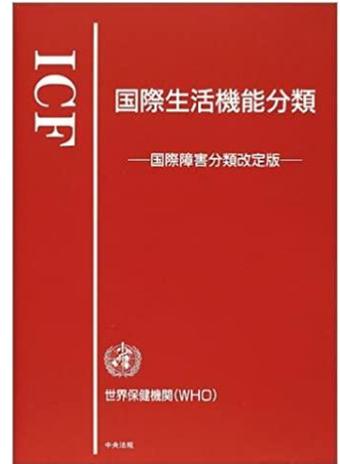
- ・プライマリアケアに対する国際分類 (ICPC)
- ・外因に対する国際分類 (ICECI)
- ・解剖、治療の見地から見た化学物質分類システム (ATC) / 一日使用薬剤容量 (DDD)
- ・障害者のためのテクニカルエイドの分類 (ISO9999)

中心分類

- ・国際疾病分類 (ICD)
- ・国際生活機能分類 (ICF)
- ・医療行為の分類 (ICHI)

派生分類

- ・国際疾病分類腫瘍学第3版 (ICD-O-3)
- ・ICD-10精神及び行動障害の分類
- ・国際疾病分類歯科学及び口腔科学への適用第3版 (ICD-DA)
- ・国際疾病分類—神経疾患への適用 (ICD-10-NA)
- ・国際生活機能分類—児童版 (ICF-CY)



【解説】

ICFは、世界保健機関WHOが策定した国際分類ファミリーの一つです。中心分類には、疾病・病気の分類であるICDがありますが、ICFも中心分類に含まれており、非常に重要な分類であることがわかります。

関連分類には、補装具などテクニカルエイドを分類したISO9999があります。右の赤い本はICFの日本語版となり、この本の中に私たちを取り巻く健康の要素がコード化されています。



ICFのコード

身体構造 body structures

第1章 神経系の構造 structures of the nervous system

- s110 脳の構造 structure of brain
- s120 脊髄と関連部位の構造 spinal cord and related structures
- s130 髄膜の構造 structure of meninges
- s140 交感神経系の構造 structure of sympathetic nervous system
- s150 副交感神経系の構造 structure of parasympathetic nervous system
- s198 その他の特定の、神経系の構造 structure of the nervous system, other specified
- s199 詳細不明の、神経系の構造 structure of the nervous system, unspecified

第2章 目・耳および関連部位の構造 the eye, ear and related structures

- s210 眼窩の構造 structure of eye socket
- s220 眼球の構造 structure of eyeball
- s230 目の周囲の構造 structures around eye
- s240 外耳の構造 structure of external ear
- s250 中耳の構造 structure of middle ear
- s260 内耳の構造 structure of inner ear
- s298 その他の特定の、目・耳および関連部位の構造 eye, ear and related structures, other specified
- s299 詳細不明の、目・耳および関連部位の構造 eye, ear and related structures, unspecified



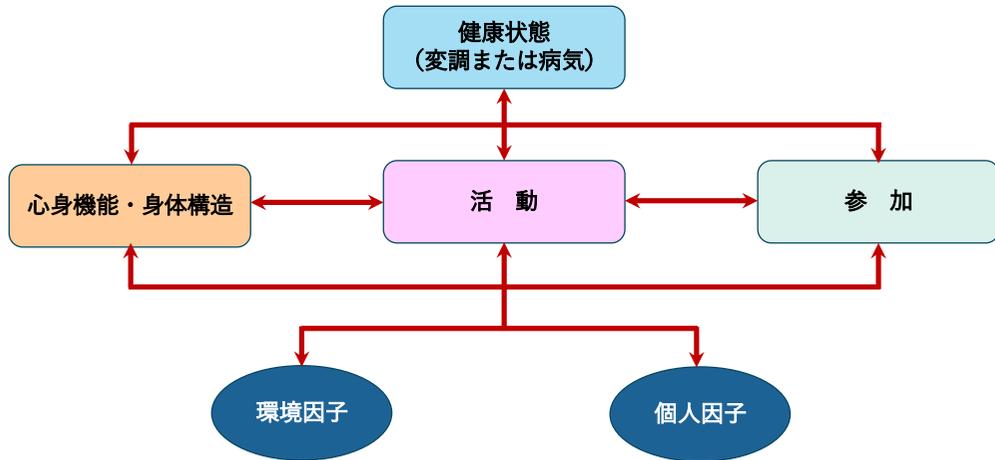
【解 説】

このICF日本語版のページをめくると、このようにアルファベットと数字によって示されたコードによって、私たちの健康に関する状況や因子が書かれています。例えば、脳の構造を s 110に置き換えることで言語が異なる国でも共通して脳の構造を意味することになります。

このようにコード化することで、国が異なっても共通の言語になります。このコードは、全部で1500程度あります。



ICFのフレームワーク



【解説】

これはICFのフレームワークを示した図となります。真ん中にある「心身機能・身体構造」「活動」「参加」を合わせて生活機能と呼び、その下の「環境因子」と「個人因子」は生活機能に影響を受け、あるいは影響を及ぼす背景因子となります。

これらの構成要素は、双方向に矢印で結ばれており、一方向の因果関係を示すだけではなく、双方向で関係しあい、一つの構成要素の状況や変化は、複数の構成要素に対して影響を及ぼすことが示されています。それぞれの構成要素については、次に説明します。



心身機能・身体構造

心身機能

- 身体系の生理的機能（心理的機能を含む）

身体構造

- 器官・肢体とその構成部分などの、身体
の解剖学的部分

否定的側面

機能障害 (構造障害を含む)

- 著しい変異や喪失などといった、心身機能
または身体構造上の問題



【解 説】

心身機能は、身体系の生理的機能とされています。つまり、「目、口、内臓、脳、手足、精神面」などの機能の状態になります。

身体構造は、体の器官や構成部分などの解剖学的部分を示します。つまり、目・口・脳・内臓・手足などの部位そのものです。

例えば、脳という構造に出血を起こすと、脳には構造障害が起こったこととなり、その結果、手足という構造に運動麻痺や感覚障害といった機能障害を起こすこととなります。

この負の要素、否定的側面は「機能障害」や「構造障害」と呼ばれています。



心身機能のコード(大分類)

- b1** 精神機能
- b2** 感覚機能と痛み
- b3** 音声と発話の機能
- b4** 心血管系・血液系・免疫系・呼吸器系の機能
- b5** 消化器系・代謝系・内分泌系の機能
- b6** 排尿・性・生殖の機能
- b7** 神経筋骨格と運動に関連する機能
- b8** 皮膚および関連する構造の機能

中分類：98 小分類：212



【解説】

ここに示されているのが「心身機能のコード」です。心身機能は、bから始まるコードで表され、ここでは大分類のみをあげています。

アルファベットbの後ろの数字は、1桁レベルですが、これが3桁、4桁と数字が増えていくことで、詳細に要素が分類されていきます。ただし、このコードを覚える必要はなく、心身機能は体の機能を扱っていると理解してください。



身体構造のコード(大分類)

- s1 神経系の構造
- s2 目・耳および関連部位の構造
- s3 音声と発話に関わる機能
- s4 心血管系・免疫系・呼吸器系の機能
- s5 消化器系・代謝系・内分泌系に関連した構造
- s6 尿路性器系および生殖器系に関連した構造
- s7 運動に関連した構造
- s8 皮膚および関連部位の構造

中分類：40 小分類：104



【解説】

ここに示されているのが「身体構造のコード」です。身体構造は、sから始まるコードで表され、体の構造そのものを扱っています。



活動

活動

- 課題や行為の個人による遂行
- 能力(できる活動)
- 実況状況(している活動)

否定的側面

活動制限

- 個人が活動を行う時に生じる難しさ



【解説】

次に「活動」です。活動は、個人が生活を送るうえで目的をもった動作や行為といえます。平たくいえばADL、日常生活活動であり、着替えや整容動作、入浴、トイレ動作、歩行などの基本的なもので、どちらかといえば自分自身で行う活動といってよいかと思います。

一方で、活動の否定的側面を活動制限と呼び、着替えが困難であったり、歩行や乗り移りなどが困難な場合を示します。なお、活動は能力と実行状況の両側面から考えるのがよいとされます。

例えば、歩行する能力が十分にあるのに、車いすを使用している場合などがあります。これは、段差などの周りの環境を整えてあげれば、歩行ができるようになるかもしれません。



参加

参加

- 生活・人生場面への関わり
- 能力(できる活動)
- 実況状況(している活動)

否定的側面

参加制約

- 個人が何らかの生活・人生場面に関わる時に経験する難しさ



【解説】

次に「参加」は、この一つ前で説明した活動の少し上位にある活動になります。すなわち、生活・人生場面における他者への関わりとされています。例えば、活動が着替えや歩行など、自分自身で行うものであったのに対し、参加は友人とのレクリエーションや仕事などといった理解になります。

この参加の否定的側面が参加制約になり、ハンディキャップや社会的不利にあたります。参加も活動と同様に、能力と実行状況の両面から考えるのがよいとされています。



活動と参加のコード(大分類)

- d1 学習と知識の応用
- d2 一般的な課題と要求
- d3 コミュニケーション
- d4 運動・移動
- d5 セルフケア
- d6 家庭生活
- d7 対人関係
- d8 主要な生活領域(教育・仕事・経済)
- d9 コミュニティライフ・社会生活・市民生活

中分類：100 小分類：174



【解 説】

ここに示されているのが、「活動と参加のコード」になります。活動と参加は、生活の領域として一つのコードでまとめられ、dから始まるコードで表されます。

大分類は9項目となりますが、d6の家庭生活からd9のコミュニティライフ・社会生活・市民生活までが、参加の項目としてよく扱われます。なお、活動と参加を別々に扱う場合には、活動はaから始まるコードで表され、参加はpから始まるコードで表されます。



環境因子

環境因子

■人々が生活し、人生を送っている物的な環境や社会的環境、人々の社会的な態度による環境を構成する因子

物的環境

■建物や道路、交通機関、自然環境など

人的環境

■家族や友人、同僚などの周囲の人間との関わりなど

制度的環境

■医療や福祉をはじめとしたあらゆる法律や制度、サービスなど

促進因子

■「環境因子」が「生活機能」に対してプラスの影響をしている場合

阻害因子

■「環境因子」が「生活機能」に対してマイナスの影響をしている場合



【解説】

次に背景因子については、これまで説明した生活機能に大きな影響を及ぼしますが、まずは背景因子の構成要素の一つである「環境因子」から説明します。環境因子は、建物や道路、交通機関、自然環境などの「物的環境」、家族や友人、同僚などの周囲の人間などの「人的環境」、医療や福祉をはじめとしたあらゆる法律や制度、サービスなどの「制度的環境」に分けることができます。もっと簡単にいえば、私たちを取り巻くすべてのものとなります。

環境因子は、生活機能に良い影響を及ぼす場合、その環境因子は「促進因子」と呼ばれます。例えば、移動という活動制限がある場合、車いすという環境因子は活動という生活機能の促進因子となります。

逆に、車いすで移動する活動を考えた場合、段差という環境因子は移動という活動に対しては障壁として働きます。このような時、段差という環境因子は活動という生活機能に対して阻害因子となります。



環境因子(大分類)

- e1 生産品と用具
- e2 自然環境と人間がもたらした環境変化
- e3 支援と関係
- e4 態度
- e5 サービス・制度・政策

中分類：64 小分類：103



【解説】

ここに示されているのが「環境因子のコード」になり、eから始まるコードで表されます。大分類は5項目となりますが、私たちの生活には重要な要素ばかりです。例えば、支援機器はe1の生産品と用具に含まれます。なお、第Ⅱ章で説明した「関連する法律」はe5のサービス・制度・政策にあたります。



個人因子

個人因子

■個人の人生や生活の特別な背景であり、健康状態や健康状況以外のその人の特徴からなる性別、人種、年齢、その他の健康状態、体力、ライフスタイル、習慣、生育歴、困難への対処方法、社会的背景、教育歴、職業、過去および現在の経験、全体的な行動様式、性格、個人の心理的資質、その他の特質など



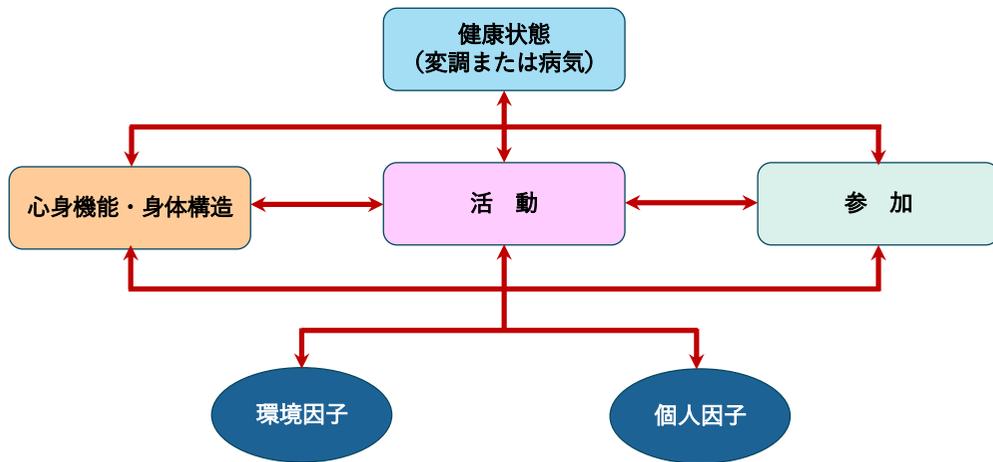
【解説】

最後は「個人因子」です。個人因子は、国や環境によっても異なるとされているため、ICFではまだコード化されていません。しかも、生活機能や環境因子にも影響を与えるため、重要な因子です。例えば、年齢や性別などの個人因子は、さまざまな生活機能に結びつきます。年齢によっては運動機能の低下や、それこそ疾病のリスクも高くなります。

人種は、日本ではあまり関係はないかもしれませんが、国が変われば社会参加を妨げる因子ともなりえます。



ICFのフレームワーク



【解説】

ここで再度、ICFのフレームワークに戻り、脳卒中について考えてみましょう。脳卒中は、脳の血管が詰まったり、破れたりして脳に損傷をきたし、主に片側の手足に運動麻痺や感覚障害、あるいは言語障害などを発症する病気です。

この脳卒中により、心身機能の否定的側面である機能障害が生じます。機能障害は、歩くことやコミュニケーションに障害をもたらし、これが活動の否定的側面である活動制限です。歩けなかったり、会話が難しいことで、家の中に閉じこもったり、外に出る機会が減少してしまうかもしれません。これにより、社会参加の機会が制約され、これが参加の否定的側面の参加制約となります。

一方で、歩くことを支援する杖や、移動を支援する車いすを使用するとどうなるでしょうか？あるいは、会話を支援する会話支援カードなどを使用することで、ちょっとしたコミュニケーションが可能になるかもしれません。このような支援機器は、環境因子に含まれます。また、支援機器は活動や参加に良い影響を与えますので、促進因子となります。さらに、それらを使用できる心身機能や身体構造が残されていることも大切ですし、自身の前向きな態度などの個人因子も総合的に考えたうえで支援機器を導入する必要があります。